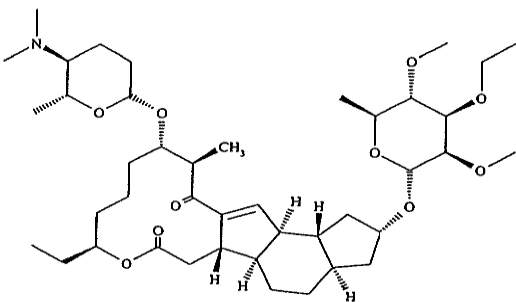


スピネトラム

I. 評価対象農薬の概要

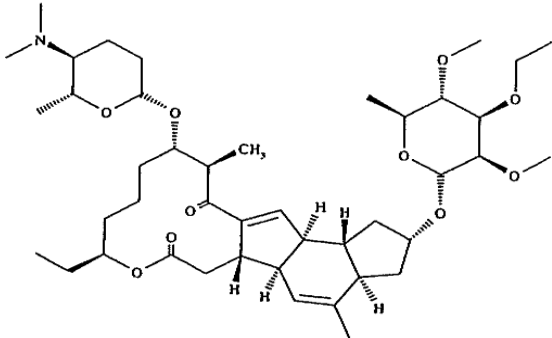
1. 物質概要

①スピネトラム-J

化学名	(1S, 2R, 5R, 7R, 9R, 10S, 14R, 15S, 19S) - 7 - (6-デオキシ-3-O-エチル-2, 4-ジ-オ-メチル- α -L-マンノピラノシルオキシ) - 15 - [(2R, 5S, 6R) - 5 - (ジメチルアミノ) テトラヒドロ-6-メチルピラン-2-イルオキシ] - 19-エチル-14-メチル-20-オキサテトラシクロ [10. 10. 0. 0 ^{2, 10} . 0 ^{5, 9}] ドコサ-11-エン-13, 21-ジオン				
分子式	C ₄₂ H ₆₉ N ₁₀	分子量	748.02	CAS NO.	187166-40-1
構造式					

※化学名を平成23年3月31日に変更

②スピネトラム-L

化学名	(1S, 2S, 5R, 7S, 9S, 10S, 14R, 15S, 19S) - 7 - (6-デオキシ-3-O-エチル-2, 4-ジ-オ-メチル- α -L-マンノピラノシルオキシ) - 15 - [(2R, 5S, 6R) - 5 - (ジメチルアミノ) テトラヒドロ-6-メチルピラン-2-イルオキシ] - 19-エチル-4, 14-ジメチル-20-オキサテトラシクロ [10. 10. 0. 0 ^{2, 10} . 0 ^{5, 9}] ドコサ-3, 11-ジエン-13, 21-ジオン				
分子式	C ₄₃ H ₆₉ N ₁₀	分子量	760.03	CAS NO.	187166-15-0
構造式					

※化学名を平成23年3月31日に変更

2. 開発の経緯等

スピネトラムは、スピネトラム-Jとスピネトラム-Lの混合物であり、土壌放線菌が産生する活性物質スピノシンに由来する殺虫剤であって、本邦では未登録である。

製剤は粒剤、水和剤、水溶剤が、適用作物は稲、果樹、野菜等として、登録申請されている。

3. 各種物性

①スピネトラム-J

外観	白色粉末、無臭 (22.5℃)	土壌吸着係数	Koc= 1,200 - 3,440 (25℃)
融点	143.4℃	オクタノール ／水分配係数	logPow = 2.44±0.10 (pH5) = 4.09±0.16 (pH7) = 4.22 (pH9)
沸点	297.8℃で分解	密度	1.1495±0.0015 g/cm ³ (19.5±0.4℃)
蒸気圧	5.3×10 ⁻⁵ Pa (20℃) 6.0×10 ⁻⁵ Pa (25℃)	水溶解度	1.00×10 ⁴ μg/L (20℃)
加水分解性	半減期 安定 (pH5、7、25℃) 分解が遅く算出不能 (pH9、25℃)	水中光分解性	半減期 0.38日 (緩衝液、pH7、25℃、 454W/m ² 、290-800nm) 0.13日 (滅菌自然水、pH8.5、 482 W/m ² 、290-800nm)

②スピネトラム-L

外観	白から黄色の結晶、アーモンド臭 (22.9℃)	土壌吸着係数	Koc= 1,100 - 7,560 (25℃)
融点	70.8℃	オクタノール ／水分配係数	logPow = 2.94±0.05 (pH5) = 4.49±0.09 (pH7) = 4.82 (pH9)
沸点	290.7℃で分解	密度	1.1807±0.0167 g/cm ³ (20.1±0.6℃)
蒸気圧	2.1×10 ⁻⁵ Pa (20℃) 4.2×10 ⁻⁵ Pa (25℃)	水溶解度	3.19×10 ⁴ μg/L (20℃)
加水分解性	半減期 安定 (pH5、7、25℃) 154日 (pH9、25℃)	水中光分解性	半減期 0.17日 (緩衝液、pH7、25℃、 454W/m ² 、290-800nm) 0.07日 (滅菌自然水、pH8.5、 482 W/m ² 、290-800nm)

II. 水産動植物への毒性

1. 魚類

(1) 魚類急性毒性試験 (コイ)

コイを用いた魚類急性毒性試験が実施され、96hLC₅₀ = 3,900 μg/L であった。

表1 コイ急性毒性試験結果

被験物質	原体
供試生物	コイ (<i>Cyprinus carpio</i>)
暴露方法	半止水式 (暴露開始 48 時間後に換水)
暴露期間	96h
設定濃度 (μg/L)	1,000、1,800、3,200、5,600、10,000 (有効成分換算値)
実測濃度 (μg/L)	920、1,700、3,100、5,600、10,000
助剤	DMF : ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油 =3 : 1(w/w) 0.1ml/L
LC ₅₀ (μg/L)	3,900 (95%信頼限界 3,500-4,400) (実測濃度に基づく)
異常な症状及び反応	遊泳異常 (緩慢遊泳・水面浮上) (1,700 μg/L 以上群) (実測濃度に基づく)
備考	被験物質濃度は J 体及び L 体の含量値

2. 甲殻類

(1) ミジンコ類急性遊泳阻害試験 (オオミジンコ)

オオミジンコを用いたミジンコ類急性遊泳阻害試験が実施され、48hEC₅₀ > 3,170 μg/L であった。

表2 オオミジンコ急性遊泳阻害試験結果

被験物質	原体
供試生物	オオミジンコ (<i>Daphnia magna</i>)
暴露方法	止水式
暴露期間	48h
設定濃度 (μg/L)	飽和溶液*
実測濃度 (μg/L)	3,170
助剤	なし
EC ₅₀ (μg/L)	>3,170 (実測濃度に基づく)
異常な症状及び反応	観察の結果、異常な症状は見られなかった。
備考	* 試験液は水 1 L に被験物質 100mg を添加、攪拌して溶解した溶液を 0.45 μm のフィルターで吸引濾過した溶液。 被験物質濃度は J 体及び L 体の含量値

3. 藻類

(1) 藻類生長阻害試験

Pseudokirchneriella subcapitata を用いた藻類生長阻害試験が実施され、 $72\text{hErC}_{50} = 1,060 \mu\text{g/L}$ であった。

表3 藻類生長阻害試験結果

被験物質	原体
供試生物	<i>Pseudokirchneriella subcapitata</i>
暴露方法	振とう培養
暴露期間	96 h
設定濃度 ($\mu\text{g/L}$)	25、 50、 100、 200、 400、 800、 1,600 (有効成分換算値)
実測濃度 ($\mu\text{g/L}$)	11.6、 27.4、 60.0、 131、 285、 638、 1,150 (0-72h)
助剤	DMF 0.1ml/L
ErC_{50} ($\mu\text{g/L}$)	1,060 (0-72h) (95%信頼限界 884-21,240) (実測濃度に基づく)
NOECr ($\mu\text{g/L}$)	11.6 (実測濃度に基づく)
異常な症状及び反応	報告書に情報なし
備考	被験物質濃度はJ体及びL体の含量値

III. 環境中予測濃度 (PEC)

1. 製剤の種類及び適用農作物等

本農薬の製剤として、粒剤 (0.5%)、水和剤 (25%) がある。

稲及び果樹に適用があるので、水田使用農薬及び非水田使用農薬として、環境中予測濃度 (PEC) を算出する。

2. PECの算出

(1) 水田使用時の予測濃度

第1段階における予測濃度を、PECが最も高くなる以下の使用方法の場合について、以下のパラメーターを用いて算出する。

表4 PEC算出に関する使用方法及びパラメーター (水田使用時第1段階)

PEC算出に関する使用方法及びパラメーター	
剤型	0.5%粒剤
地上防除/航空防除	地上
適用作物	稲
施用法	育苗箱散布
ドリフト量	粒剤、育苗箱施用のため算出せず
農薬散布量	1,000g/10a
I : 単回の農薬散布量 (有効成分 g/ha)	50g/ha
f_p : 施用法による農薬流出補正係数 (-)	0.2
T_e : 毒性試験期間	2日

これらのパラメーターより水田使用時の環境中予測濃度は以下のとおりとなる。

水田 PEC_{Tier1} による算出結果	0.15 $\mu\text{g/L}$
--------------------------	----------------------

(2) 非水田使用時の予測濃度

PECが最も高くなる以下の使用方法の場合について、以下のパラメーターを用いて算出する。

表5 PEC算出に関する使用方法及びパラメーター (非水田使用第1段階)

PEC算出に関する使用方法		各パラメーターの値	
剤型	25%水和剤	I : 単回の農薬散布量 (有効成分 g/ha)	350
農薬散布液量	700L/10a	D_{river} : 河川ドリフト率 (%)	3.4
希釈倍数	5,000倍	Z_{drift} : 1日河川ドリフト面積 (ha/day)	0.12
地上防除/航空防除	地上	N_{drift} : ドリフト寄与日数 (day)	T_e
適用作物	果樹	R_p : 畑地からの農薬流出率 (%)	0.02

施用法	散布	A_u : 農薬散布面積 (ha)	37.5
		f_u : 施用法による農薬流出係数 (-)	1
		T_e : 毒性試験期間 (day)	2

地表流出による PEC、河川ドリフトによる PEC はそれぞれ以下のとおり算出される。

非水田 PEC_{Tier1} (地表流出) による算出結果	0.0014 $\mu\text{g/L}$ 。
非水田 PEC_{Tier1} (河川ドリフト) による算出結果	0.0055 $\mu\text{g/L}$

これらのうち、値の大きい河川ドリフトによる PEC 算出結果をもって、 $PEC_{Tier1} = 0.0055$ ($\mu\text{g/L}$) となる。

(3) 環境中予測濃度

(1)、(2) より、最も値の大きい水田使用時の PEC 算出結果をもって、環境中予測濃度は、水田 $PEC_{Tier1} = 0.15$ ($\mu\text{g/L}$) となる。

IV. 総合評価

(1) 登録保留基準値案

各生物種の LC_{50} 、 EC_{50} は以下のとおりであった。

魚類（コイ急性毒性）	$96hLC_{50} =$	3,900	$\mu g/L$
甲殻類（オオミジンコ急性遊泳阻害）	$48hEC_{50} >$	3,170	$\mu g/L$
藻類（ <i>Pseudokirchneriella subcapitata</i> 生長阻害）	$72hErC_{50} =$	1,060	$\mu g/L$

これらから、

魚類急性影響濃度	$AECf = LC_{50}/10 =$	390	$\mu g/L$
甲殻類急性影響濃度	$AECd = EC_{50}/10 >$	317	$\mu g/L$
藻類急性影響濃度	$AECa = EC_{50} =$	1,060	$\mu g/L$

よって、これらのうち最小の AECd より、登録保留基準値 = 310 ($\mu g/L$) とする。

(2) リスク評価

環境中予測濃度は、水田 $PEC_{Tier1} = 0.15$ ($\mu g/L$) であり、登録保留基準値 310 ($\mu g/L$) を下回っている。

1. 検討経緯

2008年12月4日 平成20年度第4回水産動植物登録保留基準設定検討会

2. 申請者から提出されたその他の試験成績

(1) 魚類

試験の種類・被験物質	供試生物	曝露期間(hr)	毒性値 LC ₅₀ 又は EC ₅₀ (μ g/L)
急性毒性 (水和剤 25.0%、GLP)	コイ	96	24,000 (6,000)
急性毒性 (水和剤 11.7%、GLP)	コイ	96	100,000 (11,700)
急性毒性 (粒剤 0.50%、GLP)	コイ	96	>1,000,000 (>5,000)

(2) 甲殻類

試験の種類・被験物質	供試生物	曝露期間(hr)	毒性値 LC ₅₀ 又は EC ₅₀ (μ g/L)
急性遊泳毒性 (水和剤 25.0%、GLP)	オオミジンコ	48	>24,000 (>6,000)
急性遊泳毒性 (水和剤 11.7%、GLP)	オオミジンコ	48	>54,000 (>6,318)
急性遊泳毒性 (粒剤 0.50%、GLP)	オオミジンコ	48	>1,000,000 (>5,000)

(3) 藻類

試験の種類・被験物質	供試生物	曝露期間(hr)	毒性値 LC ₅₀ 又は EC ₅₀ (μ g/L)
生長阻害 (水和剤 25.0%、GLP)	<i>Pseudokirchneriella Subcapitata</i>	72	ErC ₅₀ =19,000 (4,750)
生長阻害 (水和剤 11.7%、GLP)	<i>Pseudokirchneriella Subcapitata</i>	72	ErC ₅₀ = 530,000 (62,010)
生長阻害 (粒剤 0.50%、GLP)	<i>Pseudokirchneriella Subcapitata</i>	72	ErC ₅₀ >1,000,000 (>5,000)

(注1) 製剤の毒性値のカッコ内は、有効成分換算値。

(注2) これらの試験成績は、基準値設定の根拠としたデータと比較して相対的に弱い毒性を示すデータ、評価対象生物種と異なる生物種のデータ、製剤のデータ等であることから、基準値設定の根拠としては用いなかったが、参考のために記載するものである。これらのデータの信頼性については、必ずしも十分な評価を行ったものではないことに留意が必要である。